

## 被爆 70 周年 食と平和、そしてアートへ ハノーファー市との姉妹都市間における巡回展

報告：鰐澤達夫

会 期：2015年8月1日～8月15日

会 場：広島市立大学 芸術学部棟 芸術資料館

参加作家：鰐澤達夫、シゲ・フジシロ、小林杏衣、中本順葉、  
篠原唯紀、花岡美優、ヒグラシユウイチ、青木良太  
ディレクター：現代表現領域 鰐澤達夫



本展覧会は、昨年 2014 年から世界各地を巡回している地域の特色を活かした企画展です。これまでポーランドのポツナン市を皮切りにして、イングランドのプリストル市、そして今年ドイツのハノーファー市にて開催されました。そして、この度の開催は、私（鰐澤達夫）によるディレクションのもと、被爆 70 年の節目となる広島で「食と平和」をテーマにして企画されています。参加作家には、ポツナンやハノーファー等の展覧会にも参加した、シゲ フジシロ、小林杏衣、鰐澤達夫の 3 作家をメインに据えて、新たにヒグラシユウイチ、篠原唯紀、中本順葉、花岡優美、青木良太を加えた 8 人が名を連ねています。それでは、それぞれの作家達の出品作品について、僅かですが解説を交えて紹介したいと思います。

シゲ フジシロは、愛や平和を象徴する花によって会場全体をインスタレーションする中、豊かな食卓を安全ピンとビーズで制作した作品を出品しました。大量に使用した鋭利な安全ピンからは、避け難く攻撃的なエモーションや痛覚的なカオスが感じられますが、それらが花や食卓という幸福な姿を構成していることから、複雑な世界情勢やそこに息づく人々の不条理な生活を喚起します。また、ドイツ在住の彼はドイツのエコバックも同時に展示しています。食料の供給源と食卓を繋ぐエコバックにより、彼の表現は広範な視座を獲得していると言えます。

小林杏衣は、『おっ杯』や『ウルトラ観音 off』『円盤投げの彼』『ポッキー セレモニー』『パンツ アンド ミー』（映像作品 + 立体作品）というように多彩な作品を出展していますが、これらの作品には一貫して悲壮感を纏ったユーモアが漂っています。作品『おっ杯』からは、母乳からお酒へと食生活が変遷すると共に、人が成長するにつれて失っていくものへの郷愁。『ウルトラ観音 off』からは休憩する正義の使者の姿に、理想と現実のギャップが感じられます。

さらに、紀元前のギリシャ彫刻「円盤を投げる人」を毛糸のセーターで包んだ作品『円盤投げの彼』からは、大切に受け継がれる遺跡がある一方で、テロリストによって破壊される遺跡にも思いが巡ります。また、異文化間に潜むスキンシップの差異やジェンダーへの社会通念とそれらへ注がれる視線を映した作品『ポッキーセレモニー』と『パンツ アンド ミー』からは、社会問題へとアプローチする表現者としての挑戦が伺えます。

そして、私、鰐澤達夫の作品は、「冷たい食事」と皮肉られるドイツの食文化を取り挙げた作品となっています。「冷たい食事」とは、度重なる戦争によって男性を失ったために、多くの女性が働き、疲れて調理どころではなかったネガティブな時代から続くドイツの食文化です。その「冷たい食事」をあえて食品サンプルを用いて表した盆景と共に、軸仕立ての色紙によるドローイングによって作品を構成しています。歴史により生まれる習慣が国境を越えて融合したときに、私達が直面する「何か」がこの作品には内在していると考えています。



小林杏衣 | シゲフジシロ  
鰐澤達夫

ヒグラシ ユウイチは、約 4 億年前に誕生したとされる岩塩を彫刻して銃を造り上げました。向かい合う銃と下に置かれた葉莢は、ライトボックスのほのかな光によって、我々の生命維持にとって大変重要な塩の存在を美しく映し出します。塩が「生」を育むものであることに対して、銃の向かう先には常に「死」が待ち構えています。そして、塩が調味料として消費され消滅してしまう存在であることを前提に考えれば、岩塩で造られた銃からは、食べ尽くして銃そのものを消し去ろうとしているかの様な強い意思を感じます。また、塩を用いた彫刻作品という繋がりからは、彫刻家・村岡三郎の作品にも思い至ります。

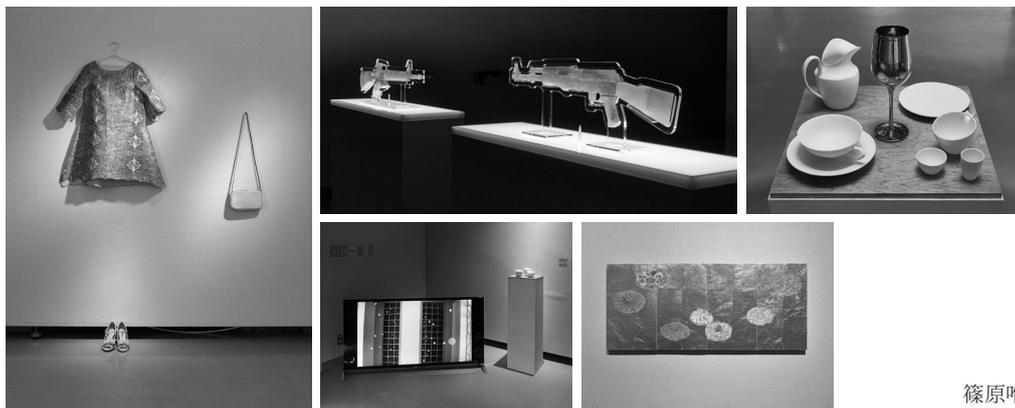
篠原唯紀の『Meet Dress』は、ワンピースやスカートやパンツといった 3 種類のコスチュームと 3 足の靴を、全て牛皮によって表面を覆う表現が行われています。また、それら女性用の装飾品の裏地には、グロテスクな霜降り肉の模様がプリントされており、その「内側」と「外側」との狭間に強いコントラストを生じさせています。私達の視線に直接写る豪華な「外面性」と、時として私達の視線から逃がれ隠れる場所としての「内面性」と捉えるならば、近年の日本で表面化した食品偽装問題を彷彿とさせるのみならず、或は若い女性の複雑な感情の機微をも正確に捉えているのかもしれない。

中本順葉は、お弁当のおかずを包むアルミカップに挟まれた、ただ捨てられる運命にある包装用薄紙を用いてパフォーマンスを行いました。作品はその包装用薄紙の展示とパフォーマンスを記録した映像の 2 点です。5 階の高さから次々に落下するカップの薄紙は、まるで異次元の時の流れに我々を誘うかのような体験を提供してくれました。彼女の作品は、一貫して「瞬間と持続」によって制作されており、一瞬の美しさを切り取って提示しています。捨てられる包装用薄紙にあえて着目する観点には、困難な社会状況を改善するヒントが隠されているように思います。

花岡優美は、『肉牡丹図屏風』と『国産豚コマ切牡丹扇図』と題して、新聞の中に毎日挟まれているスーパーのチラシをもとに、豚しゃぶ、牛しゃぶ用肉、国産豚コマ切肉などをチラシから直接トレースダウンして、格調高い牡丹の花を描いてみせました。薄く切られ、トレーに美しく盛られた肉片は、2 色刷りのチープなチラシから、金箔地を背景とした日本画へと高められています。チラシから日本画へと置換された表現からは、ところで、食料品が本来持っている本質的な価値は何処に行ってしまったのか? その所在を問い正しているように思えます。

青木良太は、生粋の陶芸家ですが、現代美術や他分野との関わりを深く持つ現代性を兼ね備えています。彼は、戦国時代の権力者が褒美に土地を渡せなくなった時代に、名品と言われる陶器を土地のかわりに渡したことから着想を得て、金のおちょこや金のワイングラスを制作しました。現代の私達にとって、優れた陶器に驚く程の値打ちがあることは自明ですが、食べることに苦勞した戦国時代に、食事を盛る器の方が食料よりも価値が高かったことに対して、あらためて矛盾があることに気づかされます。また、その矛盾を逆説的に捉えれば、私達が享受する文化の根幹にも思いを馳せずにはいられません。

このように、参加作家達は、展覧会にみずみずしい観点を数多く提供してくれました。彼や彼女らの作品があったからこそ「食と平和」という困難なテーマにも関わらず、多様で豊かな企画展が実現しました。「食」と「平和」は、一見それぞれ関係のないものの様に感じられますが、おなかが一杯になれば人は争うことはしないでしょう。満たされて眠くなることも平和の印と言えるかもしれません。戦後の日本は非常に貧しく食べることは苦勞が伴いました。現代の日本はそれを克服しつつあります。しかし、実際に食べることにすら苦しむ国では、現代美術の世界など、考えられない意味不明な芸術だと言われるだろうし、そもそも不要なものでしょう。



|           |             |
|-----------|-------------|
| ヒグラシ ユウイチ | 青木良太        |
| 篠原唯紀      | 中本順葉   花岡優美 |

現代美術は、一部の先進国のお金持ち達が、売り買いしている代物に過ぎないと言う人もいるでしょう。ただ、今回の展示によって、食の重要性を認識しつつ、それが平和をもたらすことを、我々は忘れてはいけないのではないのでしょうか？なぜなら、大前提として、人は食が満たされてこそ思考し、豊かで知的な時間を過ごすことが出来るからです。本展覧会に集った作品が、私達の置かれた文化状況をもう一度根底から問い直すきっかけとなれば幸いに思います。戦後70年を迎えた日本は、終戦記念日を迎える現在、安保法案に揺れています。東京都現代美術館では、会田誠氏が「おとなも子どももかんがえる ここはだれの場所？」展に「会田家」というユニットで参加。夫、妻、子供による食卓での会話を作品にしたための「檄」文に対して、賛否両論騒がれました。美術家として安保法案に対して自身の作品として挑む姿には、心を打たれます。日本の岐路に私自身は何が出来るのか？と考える時、ささやかではありますが『食と平和、そしてアートへ』展をディレクションして、無事に開催出来たことに、少しだけ安堵しています。末尾となりますが、今回の出展作品の多くが、私と彫刻科教授 チャールズ・ウォーゼンによる講義「現代美術演習」の中から生まれた作品である事、そしてディレクターの私が各作家の承諾を得て作品の展示方法やタイトル名を変更している事、これらを付け加えまして本展覧会のメッセージとさせていただきます。